東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町へ、真庭市久世の真言宗「真光寺」の檀家(だんか)でつくる婦人会が、手編みのマフラー約250枚などを送る準備を進めている。再び厳しい冬が巡ってくる現地の人々に少しでも暖かさを届けたいと、約70人が半年かけて編み上げた。14日に同町社会福祉協議会などにあてて発送する。（根本博行）

被災地の岩手県大槌町に送るマフラーを編む女性たち（真庭市久世の真光寺で）

冬の岩手へ手編みマフラー

真庭・真光寺檀家の婦人会

半年がかり 250枚 大槌へ14日発送

震災から1年余りの今年4月、神谷慈晃・同寺住職の妻雅子さん(76)が婦人会の総会で、「現地にボランティアに行きたいが、年齢や体力面で難しい。現金を送ることより、心のこもった支援が出来ないか」と提案。市内の主婦らが昨秋、被災地へ手編みのひざ掛けを送ったことも参考に、会員で編み物に取り組むことを決めた。

材料の毛糸は新たに購入したほか、タンスの奥に眠っていたり、不要になった子どものセーターをほどいたりしたものも活用。マフラーのほか、つなげるとひざ掛けとなるモチーフ(10チン角)480枚や、帽子、ソックス、ベストなどを、会員たちが家事や仕事の合間を見つけては編んでいった。

送り先が大槌町となったのは、雅子さんが7月、同町の稲荷神社関係者による講演会を開いたことがきっかけ。多くの犠牲者を出すなどした惨状を聞き、改めて被害の甚大さを知ったという。

時に30チン前後の積雪に見舞われる久世に住む会員たちは、同様に厳冬を過ごす東北の人々に思いをはせ、発送日までできるだけ多くの枚数を編み上げたいと作業を続けている。

雅子さんは「震災から1年8か月になるが、まだまだ復興にはほど遠いと思う。震災が風化しないよう、普段から被災地のことを忘れないようにしたい」と話し、石尾都会長(76)は「手作りしたマフラーなどが、被災地の人々にとって元気に過ごせる一助となれば」と願っている。